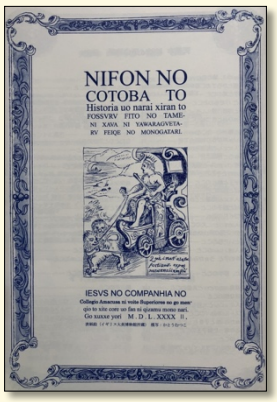
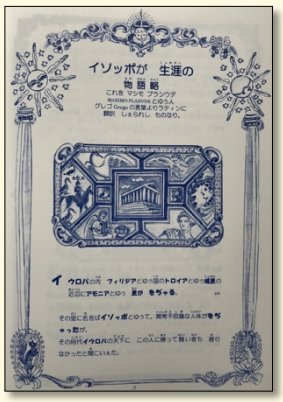
天草本・イソップ物語・考

天草キリシタン本・ラティン文字
近畿地方古語訳・「ESOPONO FABVLAS」





1592 年～1598 年、文禄の役・慶長の役の最中、キリシタン大名小西アゴスティーニョ行長・肥州(熊本)宇土城 24 万石の領土内、特に天草に於いては、イエズス会の 30 近くもの教会と 60 人ものパアドレ(宣教師)やそれに准ずるイルマンなどがいた。**小西行長**が 1600 年、関ヶ原の戦いで没するまでの彼の領国民は、豊臣秀吉が発令した「キリシタン禁教令」の中、九州におけるキリシタンの黄金時代とも言える足かけ 13 年間の時を謳歌し、30 冊に及ぶキリシタンの書物を出版していたことをご存知だろうか。その中の一冊『**平家物語・ESOPONO FABVLAS**』との出逢いが、この『天草本・いそっぽの物語』としてさし絵を描き、400 年の時を超えて、絵本として世に送り出す縁となった。

1590 年(天正 16 年)、8 年の歳月をかけて帰国した**天正遣欧ローマ少年使節団**。しかし、豊臣秀吉は「キリシタン禁教令」により、バリアーノ率いる使節団を受け入れることは無かった。彼らが持ち帰った西洋の文化文明の数々、その貴重な帰国船は、どうなったのか？

大胆にもその船を引き受けたのは、秀吉の海軍奉行・小西行長であった。帰国船は、いくつもの良港を持ってアジアの海を航行し栄える行長の領土、宇土・天草の地に、密かに入港したのである。

その時、イタリア・ルネッサンス期の豪華な衣装や家具、絵画、リュート、リコーダ、ヴィオラ、ヴァージナル、ガンバなどの楽器がもたらされ、天草志岐では、イタリア人、ジョバンニ・ニコラオの工房(美術学校)で、油絵による聖画や屏風絵、聖像、ロザリオ、メダイの制作、賛美歌合唱用のオルガンや時計、日本の竹で作られたパイプオルガンなどの製作、そして、”**天草学林**”と呼ばれるコレジョ(９年生の大学)、神学校、修練院などなどの、日本初の素晴らしい教育機関が天草に展開されたのである。

特筆すべきは、ローマ少年使節団の帰国船には、**グーテンベルク銅版活版印刷機**が乗っていたことである。1592 年より、5 年間で 29 冊ものキリシタンの書籍が天草で発行されたとゆう。これらは「**キリシタン・天草本**」と呼ばれ現在、貴重な資料となっている。「島原

加津佐本」、長崎で発行された「長崎本」を入れると 53 冊にも及ぶ。

発行部数は各々約1,500～3,000 冊と云い、本場のドイツや西欧諸国での 300～500冊に比べれば圧倒的に多い。それは「文字の翻刻(活字)の日本人による高水準の技術が、それを可能にした」と、宣教師ルイス・フロイスらが日本人の技術の高さに感嘆している。それらのキリシタン本は、主に、全国の教会や大名たちや会員に配布されたと伝わる。

特に私が興味を魅かれたのは、その中に、『**平家物語・イソップ物語**』が発行されていることである。ラティン文字・日本語音読みにより、500 ページにも及び和綴じされ、表紙には、『日本の言葉とヒストリア(歴史)を習い知らんと欲する人のために世話に和らげたる平家の物語」パアドレたちが日本語を学ぶための教科書としてまた、**最近の人々は神理を聞く耳を持たないので、耳近い短い物語で神理を版に刻む**と書かれており、この本に出逢った時、全身に身震いが走るほどの衝撃であった。

＊「平家の物語」表紙絵参照（かとう むつこ 模写）

＊イギリス大英博物館収蔵/アーネスト・サトウ旧蔵本。徳川幕府の厳しい禁教令により、キリシタン版「平家の物語・イソップ物語」は、日本には一冊も遺されていないという。

この「平家の物語・イソップの物語」のユニークさ、おもしろさ可愛らしさに加えて、さらに貴重な価値は、足利・室町時代から安土桃山時代にかけて近畿地方で使われていた公家や上流武士たちの「おじゃることば」で語られていることで、現在、400 年前の言葉の研究資料としても貴重な文献となっていることである。

こうして、“**近畿地方のおじゃることば**”で綴られた和訳本に私は一層、興味をそそられていくこととなった。読み進むと、女性特有の表現がユーモラスで温かい。

ひつじや、狼（うぉかみ）や、ライオンや、かえる（かいる）や、蟻（あり）たちが、次のように語る。

「あらわいてくだされなと(表われて下されなと)」「きこしめせ(聞いてください)」

「おどおりぢゃ(その通りじゃ)」「おやりやったぞ(なされたぞ)」

「なじぇに(なぜ)人々わ　お悲しみあるぞ」「おぢゃわん(お茶碗)」

「お羽をすぼめて　かがみまわった」「そなたのお声をば　やがて　承　り知ったとゆうて」「親しいをも、お遠いをも　分かたず、平等に笑い顔を人に表しぇ」

この女性は、“能（のう）”や“狂言（きょうげん）”、“四書（ししょ）・七書（しっちょ）”の知識があり、ギリシャの「イソップ物語」の和訳に、随所にそれらの一節を盛り込んでいるのも、非常に興味深く楽しい。

パードレたちが日本語を学ぶために、ラティン文字で記録されたことは、「しゃしぃしゅしぇしょ、じゃじぃじゅじぇじょ」など、当時の柔らかく温かい発音が、そのままに書き遺されていて、幸いであった。400 年前は「さしすせそ」と発音するのは、野蛮な言葉とされていたという。

あるパアドレが綴る。「故郷を去って万里を通して、茫々たる孤海に船渡りをして、天の実りを広め、迷える衆生を救わんと　切なる願いを同じゅうし---」

「この国に来たって　天の実りを説かんとするには、この国の風俗を知り、また言葉を　達すべきこと　もっぱらなり---」

遠い異国から波頭を越えて遥々やってきたパアドレやイルマンたちが、やわらかい近畿

地方の言葉を学び、「なぢぇに」「--ぢゃ gia」言葉で、熱い志をもって伝道していたのかと想像すると、実に微笑ましく、時を隔てても、何と尊いことかと思われる。

天草本はその後、「**伊曾保物語**（いそぽのものがたり）」として語り継がれ、1614 年頃より日本語に版刻され、ついには浮世絵師の絵入りの「万治絵本伊曾保物語」が、万治年間(1658～1660年)、御西天皇治世に出版され、大いにもてはやされてゆく。御西天皇は、『水日集』などの歌集を多数残し、和歌の才、古典への理解も深かった。

2500 年前のギリシャの”イソップ物語”を通してバビロニア王、エジプトの帝王、イウロパ、トロイア、アテナス、デルフィなどのギリシアの島々や人名や言葉を、すでに桃山時代から江戸時代の人々が知り「教訓の書」としていたこと、特に武士道に反映されたことは感慨深いものがあり、ひとしお驚嘆を覚える。

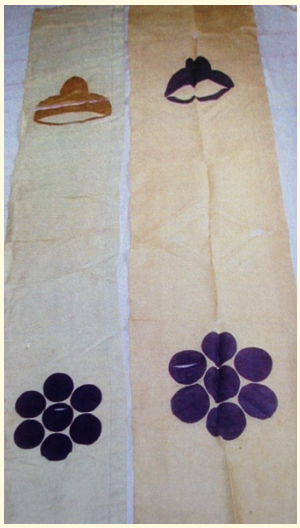
10 数年前、私は、主人の実家（福岡県朝倉市）の「平瀬加藤家文書」(古文書)を読んだ時とても興味をそそられ、そこに書かれている 400 年前の先祖が流転した場所、人物を思い描くために、日本そして韓国までもの各地を、主人と共に訪れる旅をスタートした。その中から、生き生きと立ち現われてくる、約 450 年前に生まれた加藤家の先祖の、一人の女性と出逢っていた。

その女性は、現在は、博多・聖福寺内、節信院に眠っている。節信院の裏庭に遺る彼女の墓石と、一族が家紋や幟、菩提寺の瓦紋などにしたと同じ、マリア・イエス紋が刻まれた大きな石の手水は、当時、彼女と一族がキリシタン信仰であったことを、物語っている。

この女性こそ、『天草本・イソップ物語』の編纂に協力できた女性、その人ではないかと、直感したのである。

節信院マリア・イエス紋手水

黒田美作一成所蔵・清厳寺所蔵



平瀬加藤家 幟
家紋入りマリア・イエス紋聖杯箱

「天草本イソップ物語」の翻訳原稿の作者について触れている、実に興味深い箇所がある。和訳をした日本人の名は、マルチノ原、フランシスコ・アラタケ、ファビアン(以前禅僧と伝わる)、高井コスメなどの、教会に常駐していた日本人男性とパアドレなどの名前が遺

されているが、「羅葡日辞典」の中に『長老たちがそのラテン語と日本語の出来る人に、それから日本語の秀でた日本人の会員にお願いした』と記されている箇所が気にかかった。

そして「後世の研究で『平家物語・イソップ物語』は、近畿地方の女性言葉である」と書かれた書物と出会い、非常な驚きと興味を抱いたのである。

近畿地方の上流層で生まれ育ち、能・狂言、四書・七書の教養を身につけていたおじゃる言葉の女性。後に、九州宇土の小西行長領に住まいして、「平家物語・イソップ物語」の天草での翻訳・編纂に携わることが出来たキリシタン女性とは、誰？どのような女性か？ と、疑問、疑問の思いを巡らせた。

私はますます、興味をそそられていくこととなり、このおじゃることばの「ESOPONO FABVLAS」の解読に取り組み始めた。そして、この興味と好奇心は、1 年後には「おじゃる言葉」が身につき、この女性寶樹院を主人公とした戦国歴史小説「急ぎ御文参らせ 候 - 寶樹院殿悲話哀話」を一気に書き上げ出版するという、実に感慨深い巡り合わせとなった。

戦国の言葉も知らない私が、歴史小説など執筆出来るはずもないと、つぶやいていた時に出逢ったラテン文字で書かれたおじゃる言葉の「ESOPONO FABVLAS」。

私は、この不思議な巡りあわせを大切に想い、長年人生の師と仰ぎ、教えを仰いでいる**高橋佳子先生から受けた「私は何者か」「何のために生まれてきたのか」「人生をどう生きればよいのか」を問い続け、魂の力、本当の人間力を解放する –** そのような生き方を登場人物に構想することとなった。

高橋先生は「人間は永遠の生命を抱く魂の存在」と捉え、現代社会が抱える様々な問題を自らに引き寄せ、魂の力によって問題の解決と新たな想像を果たしてゆく新しい生き方を提唱されている。「試練は呼びかけ」「試練は光闇を包含したカオスである」「あなたが幸せでなかったら、私も幸せでない」と語られる先生のまなざしは、人間に対する深い洞察と限りない愛情に満ちており、少しでも先生に倣ってという願いを託して、寶樹院とその時代を構想できたことは、高橋先生よりの恩恵の賜物であると、深く感謝すると共に、大きな歓びと、感慨深い人生の宝物となったのである。

– 高橋先生の著書・「新・祈りのみち」「運命の逆転」「未来は変えられる」「1 億総自己ベストの時代」「あなたが生まれてきた理由」「人生で一番知りたかったこと」「Calling」等、多数。

小説に著したこの女性の奇しき運命を、「加藤家文書」「郡家文書」「伊丹家文書」「三奈木黒田家文書」「伊丹中世史料」等により、少し辿りながらこの『ESOPONO FABVLAS・イソップ物語』の編纂に携わったであろうと推測するその理由を、検証してみよう。

その**近畿地方の女性**とは、1574 年(天正 2 年)織田信長に攻められ滅ぼされた**近畿・北摂伊丹城主**・伊丹兵庫守親保（泰親・一代親興）の子供たち、7 人の兄弟姉妹の次女**寶樹院**(ほうじゅいん・落飾後の院号)である。鎌倉時代より 400 年伊丹城の城主であった伊丹一族は、早くからのキリシタンであり、夫は、当時の近畿地方で勇猛な武将として高名を馳せた **伊丹(加藤)又左衛門尉重徳**(いたみまたざえもんのじょうしげのり)である。

伊丹城では、毎夜の如く月を愛で花を愛で、舞い、能が演じられ、乱世・生死の無常を慰めるのであった。能、狂言は、当時の武士に大いにもてはやされた。

信長に攻められ開城した伊丹城主一族は、**荒木村重**との友情により村重の重臣となるが、

5 年後、村重と共に信長に反旗を翻し、この伊丹・有岡城に豊臣秀吉の軍師・黒田官兵衛孝高(よしたか・如水)が、1 年以上も幽閉されたのである。その官兵衛を、城主・荒木村重とかつての城主・伊丹一族は敬慕し、密かに匿い助け衣食を整え、励まし尊ぶ。この間、村重と官兵衛が親しい手紙のやり取りをしていた書状が、最近発見されている。彼らは同じキリシタンの同志であった。

それらの恩に報いるため官兵衛は、姫路城に戻った後、又左衛門重徳と寶樹院の次男玉松丸(7 歳)を、養子とする。のちの**黒田美作一成**である。奇しき物語を共有した人々である。驚いたことに、この寶樹院、又左衛門、黒田官兵衛、荒木村重が実際に体験したいくつかの出来事が、この『ESOPONO FABVLAS』の中に、そっくり登場してくるのである。なぜなぜ、イソップ物語に？一体これは、いかなることか？と、驚愕であった。

その一つは、黒田官兵衛が伊丹・有岡城幽閉1 年後、生きて帰ったことを知った織田信長が、自らの過ちを悔い涙する出来事――智者イソップ（黒田官兵衛）は、捕えられ殺害を命じられたが、イルミッポ(加藤又左衛門)という臣下が、棺の中にこっそりと数ヶ月間匿うのである。イソップは、衣服も体もぼろぼろになって、からくも命を永らえて、帝王(織田信長)が誤りを悔い涙して喜ぶのであるが、このくだりが、古文書に遺された、寶樹院と伊丹一族が体験した酷似した言葉、酷似した展開で出てくる。「体験した者が残すことのできる言葉！」と、驚愕と確信を覚えた。

二つ目は、イソップが、『子に与えた、教訓』と黒田官兵衛が『家臣に与えた教訓』とが、あまりにも酷似している。

この世に「イソップ物語」が翻訳和訳された後の、官兵衛の家臣への教訓なのか？「いずれにせよ、これはそこに居た寶樹院が語れる、翻訳の言葉では？」と興奮を覚えたものである。転生輪廻は、同じ運命、同じ事件を繰り返すというが、これは、もしかすると、イソップと官兵衛はと、さらに空想ロマンが広がっていくこととなり、益々、感嘆と興味が尽きない、解読への挑戦となったのである。

もう一つの驚きは、阿弥陀信仰とキリシタン信仰の中で至った慈愛と愛情を持って、**「したごころ」**の中に、**信長や秀吉を疎んだ理由**、長年共に生きた**小西行長、荒木村重など滅びた一族に対する哀悼の想い**、**高山右近、内藤ジョアン秀俊、黒田官兵衛に対する敬慕**など、切々たる**寶樹院のメッセージ**が散りばめられていると取れる箇所が、随所に出てくると、感じられることである。「したごころ」の教訓が、当時の**武士たちに大きな共感を与えた**ことは、大いにうなずける。

荒木村重が織田信長に反旗を翻し、再び、伊丹・有岡城 滅亡の憂目をみて、城を失った数年後、寶樹院と加藤・伊丹一族は摂津大坂に戻り、キリシタン大名・小西アゴスティーニョ行長の家臣となり、1588 年(天正 16 年 8 月)、行長の肥州宇土城 24 万石への移封と共に宇土城下（熊本県宇土市）へ移り住む。それから約 13 年間を、キリシタンの文化と教会とその教えの中で過ごすのである。

小西行長は、寶樹院の夫加藤又左衛門重徳に宇土城の家老職を要請するが、老齢 70 歳を理由に嫡男・加藤図書吉成が 5 千石の家老となり、小西行長の娘(養女・喜多村氏)を娶ってい

る。伊丹城を失って以来の、一族の安堵の時であった。寶樹院は 3 男 4 女の母であり『ESOPONO FABVLAS』の編纂が行われた 1593 年は、56 歳程であった。

1600 年、関が原の戦いで主君小西行長を失い、寶樹院と加藤一族は、宇土城を退城し、黒田官兵衛如水の養子となっていた次男・黒田美作一成のいる筑前福岡・甘木の領地、三奈木へ赴く。官兵衛は、筑前福岡 54 万石移封と共に、伊丹城落城以来、姻戚関係を結んだ加藤・伊丹、郡一族をことごとく千石以上の高禄の家臣として迎え入れたのである。その時、肥後熊本城下の加藤清正に捕らわれた 6 人のパアドレ(宣教師)たちも、共に官兵衛の元に救済された。

黒田シメオン官兵衛如水の夢は、弟黒田パウロ直之らと共に自国をキリシタンの理想郷にすることであった。筑前・福岡に教会が建ち、「禁教令何するものぞ」とばかりに、福岡、秋月、甘木、朝倉及び筑後久留米、柳河地方は、1614 年、徳川家康が禁教令を出すまでの 14 年間、明石ジョアン掃部全登（宇喜多秀家の家老・黒田官兵衛従弟・加藤又左衛門の宇喜多家での恩人）などを迎えて、筑前・福岡の領地に再び全国より集ったキリシタンの全盛といえる時を迎えることとなる。黒田パウロ直之の嫡男と寶樹院の次男一成の長女の婚姻が、領地秋月の教会で、美しく執り行われた。千人も収容できる教会であったと伝わるが、徳川幕府の「禁教令」により、ことごとく失われたのである。

次男**黒田美作一成の子孫**は 1 万 9 千石の筆頭家老となり、 嫡 男 加藤図書吉成の子孫は約 3 千石の家老として幕末まで続く。福岡で高名な幕末の勤王思想の大老・加藤司書は、嫡男・吉成の子孫である。鎌倉時代、栄西の開いた博多聖福寺内の節信院は、加藤又左衛門重徳の院号で、82 歳で参禅潔斎をした居宅跡であり、明治までは加藤・家老家の隠居所であったが、昭和になり、寺となった。

寶樹院の兄郡主馬首宗保良烈は、豊臣秀吉、秀頼の側近・旗本黄母衣衆であった。四人の息子を黒田官兵衛に、いち早く家臣として預け、折り有るごとに大阪城の秀吉、寧々、石田三成の情勢を隠密をもって如水に知らせ、黒田家の危機を幾度となく救っている。その息子は、 9 千石の家老として明治まで続いた。

官兵衛・長政親子が、伊丹家の末裔 3 人の従兄弟たちを筑前黒田藩の三家老として迎え入れたこと、他、伊丹・加藤一族を千石以上の高禄で迎えたこと、村重の 3 人の兄妹を迎え入れたこと、筥崎宮放生会、新ショウガの由来など、福岡市と朝倉市には、彼らの報恩感謝物語がそこここに、稀有な美談として、今も様々な形となって遺されている。

筥崎宮放生会、新ショウガの由来は、筑前 52 万石の如水のもとに迎えられた加藤又左衛門と室たちは、しばらく朝倉市荷原の黒田一成の領地に住まいするが、福岡城築城が始まった 1 年後には、又左衛門は、かつて戦いに明け暮れあまたの敵を殺めた罪を悔い、博多聖福寺内で参禅潔斎することを黒田如水に願い出る。そして、如水の許しを得て、博多聖福寺内に居宅を構えた。

ある日、如水と長政が博多筥崎宮に参詣するという情報が入るや、又左衛門は取るものもとりあえず急ぎ、庭に自生していた新生姜を根こそぎ引き抜いて泥がついたまま、如水の元へ駆けつけたという。官兵衛(如水)有岡城幽閉時の報恩感謝の念が互いに溢れ、日がな 1 日

筥崎宮の方丈で語り合ったという。その時の友情の証の新生姜の美談は、今も語り継がれて筥崎宮放生会には、泥のついた新生姜を買う習わしが、今も続いているのである。

多くの歴史資料と出会う中から、選択を誤れば、一族の生死を決する切迫した時代の中で、必死で生き抜いていた戦国時代の人々の姿、その激動の時代に救いとなる神理・キリスト教と出逢い、日本の価値観との間で逡巡しながらも、一条の光となって、神と人間の魂の尊厳を選び取っていった人々がいたことに、何度も感嘆の想いが湧きあがり、戦国歴史小説『急ぎ御文参らせ候』は、涙なしには描けない小説となった。高山右近、黒田官兵衛、小西行長に代表されるそれらの人々の、一途さ純粋さ、報恩感謝と友情の物語に、この寶樹院と加藤・伊丹一族が常に寄り添っていた事実は感動であった。その感動と共に描いていくことができたことは、歓びであった。

「平瀬加藤家文書」加藤左近右衛門竹山の記録に、寶樹院のことが書かれている。

『一成君ノ御父重徳君肥後宇土ヨリ嫡子内匠助吉成主ト共ニ筑前ニ来タリ玉フ時、重徳君ハ儒人(奥方)ト共ニ下座郡荷原村長ノ家ヲ仮住所トシ玉フ、重徳君ノ儒人ト左近右衛門母ハ姉妹ナリ、同村ニテ程近ク住玉フ故ニ常ニ参謁シ安否ヲ窺イ懇遇ヲ受ケルナリ、其比家士等、儒人ノ事ヲ、大上様(おかみさま)ト唱エシト云エリ、古代ノ風俗ナルニア。』

福岡県甘木朝倉地方では今でも、身分の高い婦人を**おかみさま**と呼んだ呼び方が残っている。「ESOPONO FABVLAS」の中にも、身分の高い婦人を、イソップが、「かみさま」と呼んでいる箇所が随所に出てくるのは、この儒人寶樹院の和訳を裏づけるものとも思えて、益々歴史ロマンを湧き立たせる思いである。

寶樹院は、キリシタン禁教令が武士階級に厳しくなる 1615 年(元和元年)71 歳頃に、この世を去る。与えられた戒名・院号は『大覚王寶樹院殿鴬譽栄春大姉』。**大覚王とは、釈迦の悟りのこと**を云う。なぜ、この女性に、その院号が与えられたのか？

天草本・平家物語やイソップ物語、金句集、「羅葡日辞典」などの編纂に関わり、この世に顕した功績が加味されたことかもしれない。

寶樹院が携わり、宇土城や福岡城下で、孫やキリシタンの子供や大人を集めて「いそっぽの物語」を、おじゃる言葉で語り聞かせたかもしれないその姿を思い浮かべると、微笑ましく、温さが伝わってくる。

- ＊ -

「長兄・加藤又左衛門重徳殿は、博多節信院に眠る」と書かれた 400 年前の『加藤家文書』に従い電話帳で調べると、そこに節信院とあった。すぐにお電話をすると「はい、加藤でございます。」という声、、、。加藤昌弘和尚様と芳子奥様が、主人の『加藤シオー・十二の菩提心を描く展』個展会場にお越しくださり、戦国時代よりの時を経て兄弟姉妹の子孫との交流が始まるとは、何という奇跡のような、不思議な出逢いかと歓びとなった。

多くの方々のご協力と、加藤又左衛門重徳と寶樹院の菩提寺・節信院様の大きなご助力を

得て、歴史小説『急ぎ御文参らせ候―寶樹院殿悲話哀話』も、今回の『平成絵本・いそっぽの物語』も、世に送り出すことのできた奇縁と幸せを、ここに、心より感謝申し上げます。

ポルトガル語を話す友人の力も借りて、ラティン文字の切る発音・伸ばす発音、「しゃしぃしゅしぇしょ」の発音を確かめながら、四百年前の近畿地方の言葉に迫る挑戦を、さし絵と共に、ここに表しました。分からない言葉は、ひらがなか、ラティン文字そのままに表しました。あとは後世の研究に委ねたいと思います。

可愛らしさ一杯の『かとうむつこ絵本・いそっぽの物語』を、お楽しみください。

2017 年 4 月 8 日　　かとう むつこ

HOME PAGE

この記事への問い合わせ: galleryshioh@gmail.com